

八戸分士数と直房の官職名 —八戸藩家老中里弥次右衛門家家系からの考察—

佐々木勝宏

岩手県立博物館 020-0120 盛岡市上田字松屋敷34 Iwate Prefectural Museum, Morioka 020-0120, Japan.

1 はじめに

八戸藩成立前から藩主家を支え、家老を務めた中里弥次右衛門の子孫が代々守り伝えてきた享保年間にまとめられたと考えられる卷子仕立ての『中里家系』(以下『家系』)から、藩創立時に盛岡藩から八戸藩に分けられた侍の人数21と、初代藩主南部直房の叙位任官にあたって官職名が左衛門佐となった理由や藩士の採用について考察してみたい。

2 盛岡と八戸にわかれた中里家

まずは、直房生母の実家中里家について整理しておきたい。『南部藩参考諸家系図』(以下『系図』)に見える中里家は、巻21の〔200石・中里淳平家〕と〔60石中里傳左衛門家〕と〔118石・中里半兵衛家〕、巻52に〔50石・中里弥五郎家〕と、巻80の〔三人扶持・判司家・本名苔米地〕の五家が見える。盛岡には中里家の本流である半兵衛家と、一旦八戸藩に仕えながら帰ってきて盛岡藩に出仕した傳左衛門家、南部行信側室広照院に付き添った半五郎家が残った。

これらとは別に、藩成立時に八戸藩士となった中里氏の数家のうち、藩主直房を支え、藩政の中核を担った弥次右衛門家子孫に伝わる『家系』と『明和五年戊子天 過去牒 正月改』(以下『過去帳』)から中里家とその周辺の藩士とのつながりを婚姻関係から紐解いてみたい。『家系』には幸い、嫁いできた妻の実家や娘たちの嫁ぎ先についての記述や女性名も見える。

藩政を担った弥次右衛門家と直房長男直政の傅役を務めた清左衛門家を中心に中里家を軸とした姻戚関係を結んだ者が新設藩に多く採用されている。

『家系』の巻末には盛岡と八戸の各中里家当主と俸禄などが列記されている。『過去帳』には、弥次右衛門家と分家市太夫家は勿論、同族清右衛門などと、弥次右衛門家から嫁いだ娘たちやその夫たちの戒名も記録されている。なかでも初代藩主生母実家中里家の最大のライバルとの成り得る二代藩主生母実家川口家に

ついては四代目まで記されている。直政の周辺は清左衛門家の者達が支え、川口家は年齢的にも人材となる層が薄く、逆に中里家との婚姻によって地位を維持している感さえある。川口家出身の直政生母靈松院は身内に対して過度な取り立てを求めていないし、中里家と川口家が藩主の外戚としてともに婚姻関係を結んで藩主家を支えようとしていたことがわかる。弥次右衛門の娘は川口利景の妻であり、川口利景の娘は清左衛門息子の妻となっていた。俸禄を頂戴する藩士としては別々の家であっても、一族の結束と婚姻によって中里氏の勢力は定着し、安定していくことになった。

3 姻戚を重ねた中里家、岩泉家、接待家

『系図』によると中里氏の本名(姓)は小笠原氏。家紋は松皮菱や三階菱に丸内吉之字を用いた清和源氏の末流で、南部家の譜代の家臣とある。26代南部信直から閉伊郡中里村に88余石。27代利直から岩手郡江荊内村に11余石を加増され100石を越えて御者頭を勤めていた。

『家系』には、中里嘉兵衛正吉の妻は岩泉兵部義包の娘(本来は女ではあるが以下娘表記とする)で、中里氏、岩泉氏、接待氏の三氏はとも婚姻を数代重ねてきた間柄だと記し、藩成立に伴って盛岡藩士から八戸藩士になった人物に義包の娘婿が多く含まれる。岩泉義包の子政包は、浅石甚三郎との喧嘩刃傷がもとで改易になっているが、政包の姉妹たちは、中里嘉兵衛正吉、煙山主殿光邦、接待小右衛門宗治、駒木隼人廣三、四戸清助宗朝、和井内三平光積、高橋与市、近内長右衛門為如、山口新助、片岸用之助、荒谷宗宅、中野門助正昆、石峠右市、江繁喜左衛門、久慈中務治吉、熊谷善八、小軽米嘉兵衛らに嫁いでいる。義包の娘婿のうち中里、煙山、接待、四戸、山口、中野は八戸藩士であることが確認できる。言い換えれば中里嘉兵衛の義理の兄弟は、ほとんど八戸藩士として採用されているのである。

『系図』によれば岩泉義包は400石で、姉が大釜彦右衛門政綱の妻である。政綱の父彦次郎薩摩の妻は川口源之丞正家の娘で、政綱の母であり、霊松院の姉妹にあたる。大釜薩摩はもと斯波氏の家臣で、信直の天正年間に南部家に臣従し、本領を安堵され、利直からは大迫朴木山（おおはさま・ほおのきやま）金山奉行を任され、利直の代に薩摩から政綱に家督相続が行われて、重直に昵勤しているが、慶安二年（1649）に本貫地大釜から三戸郡荒谷村大山村川又村松岡村岩淵村安比村に500石すべて知行地替えになっている。政綱の子が彦惣（彦右衛門）政抄である。重直代に改易され、浪人のまま死亡とある。一本に父の死亡時に2歳或いは4歳で幼すぎて継目を賜らなかつたともある。重信の代に政抄の子が五駄二人扶持で彦右衛門正道が召抱えられている。ほかに政綱の弟惣八郎良重は利直から100石で召出され、罪あって録を取められ、浪人して死ぬとある。その子八郎左衛門忠隆（忠恒）は六駄二人扶持で重信に召抱えられ、加増を受け100石となり、御者頭を務めている。八戸藩の『勤功帳』初代直房の代に大釜彦惣の名が見える。政綱の子で霊松院には甥の子どもにあたる大釜氏の直系である。霊松院の近従として出仕し、後に正式に採用された漆沢氏とは、もとの大釜氏で、漆沢とは知行地名と考えられ二戸市浄法寺か紫波片寄の漆沢を姓としたのであろう。生国盛岡領の漆沢とある。霊松院は自分の賄料で甥たちを雇い入れ、生活を支え、直政が藩主になってから藩士採用してもらっている。『八戸藩士系譜書上』（以下『系譜』）に漆沢氏は三家あり、大釜家同様、霊松院の実家川口家も兄を若くして亡くし、2歳の万之丞では幼すぎて奉公が出来ないと改易になっている。母同士が姉妹の大釜政綱と大釜良重兄弟と霊松院が引き取って養育した万之丞こと川口利景と二代藩主南部直政は従兄弟同士にあたる。

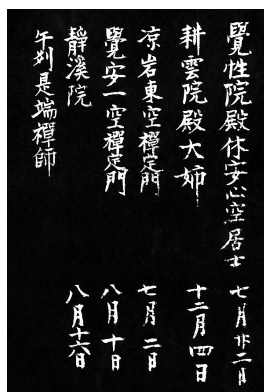


写真1：福善寺経母方戒名と祥月命日部分

4 霊松院の六人の兄弟姉妹

直政の母川口孝こと霊松院は彼女を含めて6人兄弟姉妹だと考えられる。福善寺の紺紙金泥法華経の巻三には母方戒名が記された部分があるが、直政の母方祖父覚證院、祖母耕雲院、涼岩東空禅定門が伯父正康で、覚安一空禅定門は正家と「覚」「安」「空」の3字が共通で、正康とは「空」が重なるため正康より先に亡くなった弟と考えられる。姉妹の一人目は、浅井長政、前田利家に仕え、南部信直が懇願してもらった、盛岡城の縄張りをした内堀伊豆頼式の孫勘五郎頼宗に嫁ぎ、頼古を生んだ天倫院。1000石を超える大身（家老格）に嫁いだ。墓石も位牌も内堀氏知行地であった花巻市石鳥谷町新堀の新仙寺にある。二人目は藤堂高虎旧臣千種家の二代右近成賢に嫁ぎ、儀左衛門栄成を生んだ覚心院。栄成妹が八戸藩士津村傳右衛門正善の妻になっていたことから、『八戸南部家文書』『川口家文書』冠婚葬祭関係資料に盛岡源勝寺から八戸の玄中寺、最後には、大慈寺の津村家墓地に改装したと記され、「霊松院様妹法体覚心院」とある。

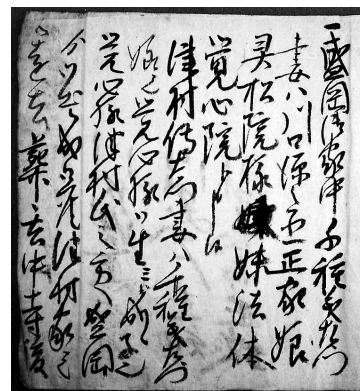


写真2：川口家文書の覚心院部分

三人目が、中里数馬直好に後妻に入った孝こと霊松院。南部直房との間に長男直政、次男直常、三子長女富を儲けている。夫直房が八戸藩主になり、家族の運命は大きく変わった。盛岡市の盛岡城下川口源之丞屋敷や岩手町川口の館で生まれ育った娘は、藩主夫人として家族と八戸藩の藩士と領民を支え、80歳の長寿を全うして東京広尾の下屋敷で亡くなった。東京タワーの麓にある勝林山金地院に長男の嫁と長男と次男と三子長女とともに墓石が並んである。八戸の南宗寺にも夫と寄り添って五輪塔が建っている。高野山の供養塔は仙寿院、清凉院（直房）、直政（天祥院）、霊松院のものが霊松院によって建立された。

霊松院を側室と記す文献も散見するが、中野右馬之

助姉の後に川口孝が直房に嫁いでから、三子に恵まれ、八戸移住後は奥様と呼称されている。『八戸藩目付所日記』（以下『日記』）からは、江戸の直房と御奥様孝と子どもたちとの間には書簡や贈答品が頻繁に見られるなど仲の良い様子が伝わって来る。孝以外に直房に夫人が居た形跡は見当たらない。正室と記録されなくても、実際は初代藩主を支え、二代藩主を養育しながら的確な指示を出し、養子の三代藩主の体制が円滑に開始できるように配慮した様子や、藩主や家老たちの対応も初代藩主正室扱いであり、信頼され、敬愛されている。

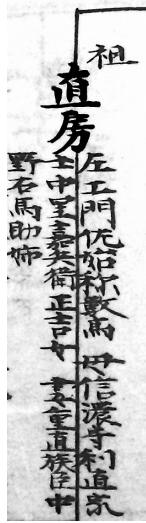


写真3：もりおか歴史文化館『直房系譜』の冒頭部分

霊松院の家族は、八戸の月溪山南宗寺藩主墓地に自分と夫と長男の墓石があり、一段下がった藩主家族墓所の中央に次男直常（天岸院）と長女富姫（操松院）と義母仙寿院の墓石がある。いずれも五輪塔である。藩政期の藩主夫人で藩主墓地に墓石供養塔があるのは霊松院のみで、その待遇が特別だったことでも正室扱いと言えるのではないかな。



写真4：南宗寺八戸藩主家墓地
〔向かって左から直常・富・仙寿院〕

江戸前期の盛岡藩士の娘の戒名が三人わかるのは、極めて珍しい。川口源之丞正家の四姉妹のうち四人目の大釜家に嫁いだ女性の俗名と戒名だけがわからない。兄弟姉妹の順も霊松院より覚心院が若いこと以外はわからない。大慈寺で覚心院墓石も津村家墓所をまだ確認できていない。

5 八戸藩士に召し抱えられた人々

分士の選考基準について確認してみたい。第一に中里数馬直好こと南部直房と御袋様（仙寿院）と奥様孝（霊松院）に孝の母耕雲院の目に適った人物を一本釣りしている。藩主になる前は、日常で様々な盛岡藩士と交際していて、その人となりを知っていた。第二に直房を支えてきた中里家を軸に姻戚関係がある者に声をかけた。これは岩泉義包の娘たちでふれた。第三に南部家譜代の家臣が全くいないわけではないが、その多くは、信直の代に召抱えられた元は他家の家臣である仙北士と言われた小野寺氏の牢人衆や秋田氏、湊氏。斯波氏に仕官して主家滅亡後、南部家家臣となった比較的、南部家家臣歴の浅い鶴飼氏、煙山氏、築田氏などにも声をかけた。第四に家老格などの大身の配下となっている寄子や盛岡藩士の次男や三男で見込みのある者を勧誘した。第五は意中の人物でも盛岡藩が離しがたい人物は、重信と直房の間で、新設藩の体制が整ったら盛岡藩に帰参する約束で採用になった期限付きの移籍組もいた。大浦治右衛門や新渡戸左五右衛門常政などはこれにあたる。

もりおか歴史文化館蔵「船越家文書」は大変興味深い。『系図』巻33に200石の船越轉家の五代目に舟越与兵衛宣貞がいる。この人物は寛文元年（1661）に新参侍の谷村惣兵衛高行に意趣があって殺害し、妻子を連れて出羽の秋田に出奔していた。寛文五年（1665）に一旦盛岡に帰ってから、直房に出仕し、また命令により、盛岡藩に帰参した大浦治右衛門である。秋田出奔中は大浦を名乗り、盛岡に帰ってからは船越に戻した。船越与兵衛の家と川口源之丞の家は、現在の田中地蔵尊から西に坂を下り終えたあたりにあった。弟船越与五兵衛は大浦作衛門と名乗っていた。孝こと霊松院がこの兄弟の人となりを知っていた。大浦治右衛門は盛岡藩帰参後も直房の一周忌香典や、直政の藩主就任の祝儀を八戸へ届けている。八戸立藩がなければ秋田で牢人のままだったかも知れず、直房のおかげで帰参できたことに強く感謝していた様子が窺える。新渡戸は娘吟が重信側室であり、重信の子勝信を生んでいる。盛岡藩主行信、八戸藩主通信と兄弟で、直政の娘菊姫を正室に迎えている。盛岡に帰る際は必ず、弟などを代わりに推挙して採用してもらっている。また儀儀氏のように永暇願いを藩主に提出して許可されるものもいた。三代通信の代にともに家老を勤めた船越治助と川口源之丞（万之丞・與十郎利景）の実家は盛岡

城下で隣同士だったのである。

6 八戸藩士としての中里家のはじまり

『系譜』弥次右衛門家分は市左衛門がまとめ、市太夫好寛に始まる。初代弥次右衛門好高は、藩体制確立期に藩主家を支え、家老として江戸や八戸の体制作りに尽力し、盛岡藩との折衝にもあたるなど、仙寿院と直房が最も信頼していた人物である。

長男市太夫好寛が病身なので家老の激務は無理と判断し、健康な次男好慶に家督を相続させた。更には三代藩主通信のご内意の形をとって弟好慶は兄市太夫の息子松之助を、好慶の長男大助を市太夫の養子とした。嫡子を交換しておいて、孫の代には元に戻したのである。弥次右衛門家の元高600石を本家500石と分家100石に分けて本家を補佐する体制をつくった。市太夫家は新田50石を加増され150石の家柄となる。わざわざ「別段の家筋儀」と記される。二万石の小藩の八戸藩にとって600石は最高の石高である。初代藩主生母仙寿院実家中里家は「別段之家」であり、『系譜』に同じような表現が使われるのは、二代藩主生母霊松院実家川口家が娘への婿養子相続などに際しても、「格別之家柄」と記される。三代藩主生母浄生院実家柄内家にはこのような扱いは見えない。藩体制確立期に藩主家を支えた中里家と川口家は、特別だったのである。結果的には中里家全体でみれば50石の加増であり、二家を出仕できるようになり、藩内での地位が安定した。弥次右衛門吉高好春の藩政のために嫡子相続をとらない冷静な非情さとしたたかさは、八戸藩を支えて行かねばならない一族の強い自負心が窺える。

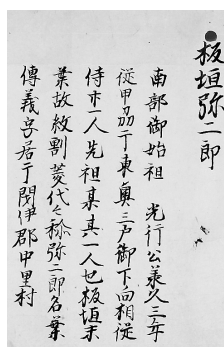
7 南部光行に随行した板垣弥二郎

『家系』は、初代を板垣弥二郎とし、承久三年（1221）に南部光行に従って甲州から東奥三戸郡下向した時の一人で家紋は割菱で、代々弥二郎を名乗りに「義」の字を用いて閉伊郡中里村に居住したと記している。

●板垣弥二郎

南部御始祖 光行公承久三年
 従甲弼于東奥三戸御下向相従
 侍廿一人先祖某一人也板垣末
 葉故紋割菱代々称弥二郎名葉
 傳義字居于閉伊郡中里村

写真5：『家系』板垣弥二郎
 南部光行随行部分



八戸藩が成立して兄盛岡藩主重信から弟八戸藩主直房が藩士を分けてもらい八戸藩士になった人数が21であった。実際に従ったのは外に部屋住みの者などが6人も加わるので27人なのだが、正式には21分士であった。なぜ21人という中途半端な数なのかわからなかった。まずは相当数の藩士が必要なのだから、20人や30人でよいのに、21人にこだわった理由はここにあった。数馬を養育した中里家にとって先祖が、光行の随行侍21の一人であることは誇りであった。その先例を尊び、これにちなんだ人数としたのだ。

分士の数はとりあえず、21人という嘉例にちなんで決め、必要に応じて採用していったのである。だから寛文12年（1672）の盛岡藩と八戸藩の境塚構築に伴う絵図や書類に署名する家老檜山善五右衛門も21人には入っていない。

享保6年（1721）9月上浣日に中里弥兵衛幸生が編集を終えた『直房公御一代集・文林君御一代集』（『御二代集』）には、津村傳左衛門、湊市郎右衛門、井上半平、秋田忠兵衛、新渡戸左五右衛門、日野左近兵衛、工藤市兵衛、池田先右衛門、神太郎左衛門、中野門助、鶴飼宮内、日澤弥五左衛門、山田仁右衛門、接待忠兵衛、大矢三十郎、鷹巢文右衛門、浅井安兵衛、烟山七郎兵衛、沼田新左衛門、浅水源六、長内弥五兵衛合廿一人 外四戸弥三右衛門、小平甚五左衛門、野田源十郎、欠端半左衛門、御部屋住ヨリ中里弥次右衛門、太田小十郎（石高と扶持省略）とあり、分士21人の氏名が伝わる。「清凉院の御代」の21人の一人の家柄であることが、八戸藩家臣団が形成されると、他家とは異なり立藩以来の特別な家柄だという誇りと自負をもたらした。

8 武田孫二郎正徳の活躍

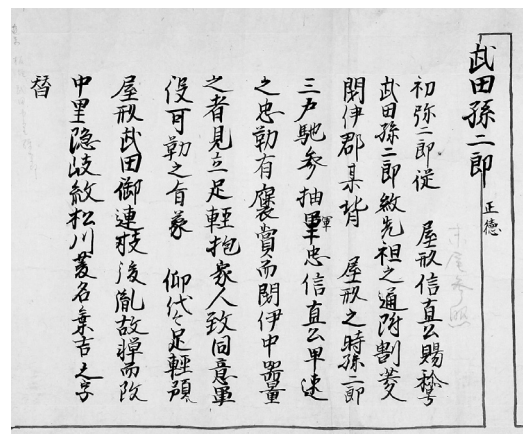


写真6：『家系』武田孫二郎正徳こと中里隠岐部分

武田弥二郎は、26代信直の時に閉伊郡で某が背いた際に三戸へ馳せ参じて、抽んでた軍忠を示し、閉伊郡中で器量の人物と褒められ、足軽を預かる身分になった。信直も武田家の連枝の後胤ため、これを憚って名を武田孫二郎から中里隠岐に改め、家紋も割菱(武田菱)から松川菱とし、名乗りの文字も「吉」としたとある。正徳の名は正徳の戒名が伝わらないが、正徳寺という寺名は中里隠岐正徳にちなむ可能性が高い。この部分は、20代信時の閉伊の田鎖氏を攻撃した際の武田河内の活躍と重なる。

武田弥二郎の代から伝わる文書や家図は嘉兵衛正吉の代に火事で失った。利直の慶長四年(1599)の岩崎陣御出馬時には者頭を務め御供した。『家系』末尾に元和二年(1616)に利直から3人分で合計100石の黒印折紙の写しを記している。嘉兵衛の子半兵衛正次は大萱生長左衛門姉を妻とし、利直の大坂御出陣に御供して後に者頭役を務めた。知行がわずかなので、たった一騎の軍役だったがその名の威勢が人に知れ、三戸城代や花巻城代、江戸留守居役を務め、左衛門佐直房が幼かった頃の懇忠は抽んでいたとある。やはり、『家系』末尾に弥次郎こと半兵衛が、寛永六年(1629)に普請の褒美として現米100石(知行30石分相当)を加増されて200石となり御者頭を務めている。

この前年、半兵衛こと弥次郎の妹利直側室仙寿院が中里数馬直好(南部直房)を生んでいる。数馬の養育料も含まれていた可能性も否定できない。半兵衛妹仙寿院は27代利直の側室で、娘右京は、29代南部行信の側室広照院となる。嘉兵衛正吉と半兵衛正次と中里氏は二代続けて娘を藩主側室にしている。

広照院は八弥という男子もあったが早世している。しかし、娘は成長し、行信の娘として、奥詰から寺社奉行や京都所司代を務めるなど幕閣の一人として活躍した丹波田辺藩三万五千石藩主で舞鶴城主の牧野讃岐守英成の正室になった。

半兵衛の子傳左衛門は八戸藩に出仕していたが広照院の求めに応じて盛岡藩に仕えた。この傳左衛門正幸の子が与市右衛門で、妻が鳴海弥左衛門の娘で、実父は同名与右衛門とある。(『家系』は鳴海の文字使用)

この成海与右衛門は、旧八戸領の紫波町土館に現存する沢口観音堂の別当成海家の先祖で、直政弟直常の傳役で、直常の病死後の供養の様子が母の霊松院の耳に入り、准胝観音像が造立され、御堂と拾石の寄進を受け、初代別当となった出家号無深である。

中里与市右衛門と成海與右衛門の娘との間に実子は記されていない。なぜ十日市に住んでいたのか、八戸市街地から南方の新井田川の右岸の台地上で、城下ではなく、街道筋の藩主送迎の場所となる地に住んだ理由はわからない。成海與右衛門の娘は延宝三年(1675)の『分限帳』にも名があり、一人扶持で直常付きだったと考えられる。

9 中里弥次右衛門家

嘉兵衛正吉の子半兵衛正次の弟に太郎左衛門がいる。その子が初代の弥次右衛門吉高(好春)で、直房、直政二代に奉仕したとある。妻は西野清介娘清子で、弥次右衛門は年寄役を務めたとあり、死亡年月日と戒名が記されている。中里数馬直好の「好」の字を賜って好春に改名している。弥次右衛門の娘は津村傳右衛門の先妻梅子で、後妻が千種右近成賢の娘で霊松院の姪である。二人目の娘は川口源之丞利景の妻鶴子で、三人目は湊九郎兵衛の妻円子であり、初代弥次右衛門の実子初代市太夫と二代弥次右衛門と兄弟姉妹である。

10 中里清左衛門家

半兵衛正次弟太郎左衛門の家から筆頭家老弥次右衛門家が始まる。半兵衛と太郎左衛門の弟が與右衛門でその子が清左衛門(弥兵衛・蔵人)である。清左衛門母は三人扶持で、直政に仕えている。清左衛門の子が直政に仕えた清右衛門蔵人幸生で、『二代集』や『旧話集』を編纂した人物である。先妻が川口源之丞利景の娘で、後妻が戸来惣右衛門娘である。蔵人の妹が三代弥次右衛門好慶の妻である。石高・家格が同等ぐらいで婚姻を重ねると、どうしても同族中里氏か、中里ゆかりの釣り合いのとれた家との婚姻が多くなる。

清左衛門は幼名金之尉で宅吉や宅幸、妻は太田原主水の娘である。天祥院こと直政から葛巻と新井田に知行地もらって年寄役を務め死後は大慈寺に葬られたとある。直政の乳母である岩野氏に嫁いだ松屋妙亀大姉の五輪塔墓石は大慈寺で一番古い。『新編文林全集』にある乳母を供養する梵鐘銘には中里宅義が久しく知っているとある、川口源之丞利景妻の戒名の鶴操妙亀大姉に良く似ている。直政の乳母も中里宅義の姉妹の可能性が高い。乳母の子どもたちには直政の死によって十両ずつが下賜される。その一人、岩野庄五郎は、盂蘭盆会に際して、藩主家墓所の灯籠奉行を仰せつがっている。

11 左衛門佐を選んだ理由

『南部舊指録』「南部光行公奥州御下向之事」から始まり、十四代義政公御代之事のなかに「左衛門佐信時公（割書：閉伊の押領使田鎖氏討亡 信時南部廿代主也）」とある。田鎖氏征討が左衛門佐信時で、この際の軍功で先祖の武田河内が同心（足軽）を30人預かると『家系』に見える。この伝承に基づいて中里数馬直好改め南部直房が叙位任官に際して、希望の官職を予め問われ、この左衛門佐を希望したと考えられる。

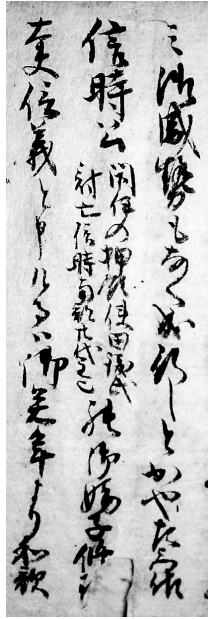


写真7：左衛門佐信時部分

藩祖信直の官職名は大膳大夫であり、三戸南部家当主に就任し、豊臣政権から領地を安堵してもらい、近世大名としての地位を確立するために前田利家に仲介を頼み、九戸政実の乱に際しては中央からの援軍を要請して派兵してもらうなど、信直から全幅の信頼を得ていたのが家老北信愛であった。彼の当時の自称官職名が左衛門佐であり、長兄重直の遺領を分割せず、次兄重信に全領地を継いでもらって、自分は次兄の家臣として家を支えて行くつもりだと申し出た末弟にふさわしい、補佐役に徹する意味合いも含められる。次兄を祖父信直に見立て、自分を補佐役の北信愛に准える「左衛門佐」は直房にとっても、中里家にとっても、先祖を顕彰し、由来を構築しておくためにもうってつけの官職名であった。

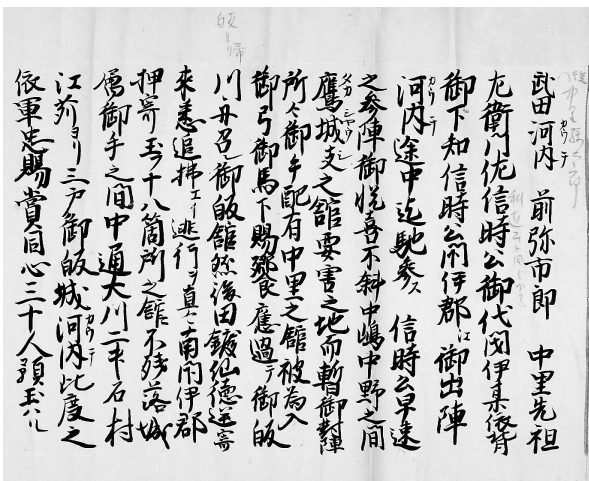


写真8：武田河内の閉伊出陣による軍功部分

兄重信の官職名は、祖父で藩祖でもある信直と同じ大膳大夫である。弟直房は、兄重信と同じ従五位下でありながら、大膳大夫より低めの官職を名乗る必要があり、初めて藩主になるから、ゆかりの官職名があるわけではない。そこで母の実家に伝わる先祖の武田河内が左衛門佐信時に従って武功をあげた故事にちなみ、左衛門佐を選んだのであろう。

中里家の祖先、武田河内は20代南部左衛門佐信時に従って閉伊郡御出陣に参加したこと、信時は中里近くの鷹城支（たかじょうし）之館で暫く滞在して、味方への饗応や、馬や弓を下賜したことにふれる。田鎖や仙徳（ともに現在の宮古市の根城・城内や千徳を指す）の敵を追い払って18箇所の館を残らず落城させ中通、大川、二升石（岩泉町）から江荊（葛巻町）を通して三戸へ凱旋した。河内はこの時の軍忠によって同心30人を預かる身分となったと書かれている。

中里氏にとって先祖の武田河内が、左衛門佐信時に従って軍功をあげたこの言い伝えは、中里氏にとって名誉なことであると同時に、左衛門佐への従軍が家運を隆盛するきっかけになったため、この故事にちなむことが大事だったのである。

12 『家系』に見える仙寿院と中里家

この家系なかで、中里家にとって一番重要なことが書かれている部分が仙寿院の記述の部分である。書き出しは千寿院とあるが仙寿院のことである。

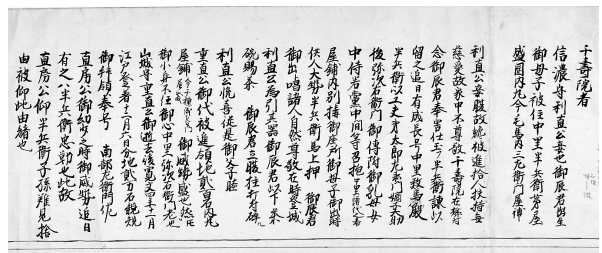


写真9：仙寿院の部分

信濃守利直の側室仙寿院は父中里半兵衛の茅屋で、辰丸君を生んだ。寛永五年（1628）干支の戊辰にちなむ命名であろう。盛岡内丸の毛馬内三左衛門屋舗がある所だ。利直の妾腹のためか、わずかに十人扶持（60石相当）をあてがわれ、無慈悲な扱ひのため、盛岡藩家中からは軽視されていたため、仙寿院は鬱病になって辰丸を殺害しようしたのを兄半兵衛が気づいて止めた。半兵衛は成人後、数馬と名乗る辰丸君に弟太郎左衛門の子弥次右衛門を御傳役として付けた。このほか

にも乳母、女中、侍、若党、中間などはすべて中里譜代の者たちから選び、中里氏が費用負担して召抱えた。屋舗の内に別に御座所も構えて、母子が出かける時は御供を大勢つけて馬上で抱き、お出ましであることを大声で先触れをするようにしたので、自然にみんなが尊敬するようになった。登城して父の利直から辰丸君以下がお茶を賜ったが、辰丸君は腹を立てて、その茶碗を柱に打ち付け、割ってしまった。利直はその様子を見て大いに喜び、父子の間柄も睦まじくなったとある。文意が取りにくい、利直没年のことであっても辰丸は数え5歳である。豪快さを利直は気に入ったのであろうか。

重直の時代には領地が200石（花巻市八重畑村と軽米町山内駒板村で各100石）となって、内丸に御屋舗を賜って威勢が盛んになった。それでもまだ小身扱いなので弥次右衛門は不満に思っていた。拝領屋敷地は今、千種儀左衛門屋敷となっている。重直の死後、幕府から召出され、分地二万石を新規に父利直の功績に対して拝領した。南部左衛門佐直房と名乗り八戸藩二万石の藩主となった。こうなれたのは半兵衛の忠勤のおかげなので、直房は半兵衛の子孫（中里氏）を決して見捨てないと言ったと記している。

七戸直時の養子となり、七戸隼人重政と名のり家老になったり、山田主水利長のように片諱をもらって名乗ってもいない。二人の兄に比べれば確かなにおざりにされている。母親が鬱状態になって息子を殺害しようとするほど追い込まれるほどの処遇で、中里氏から従者がつけなければ対面を保てず、誕生から八戸藩主になるまで、中里家の援助なしでは全く立ち行かなかった。だからこそ中里氏から受けた恩義に報いるためにも中里氏の子孫を疎かにはできないと直房が思ったのも当然のことであろう。仙寿院は実家の父や兄たちに申し訳なく、みじめな思いを抱いて暮らしていたのである。そんな仕打ちを受けて育っても、直房は菩提寺の名前を父の戒名から月溪山南宗寺とした。岩手県立図書館所蔵の正保年間の盛岡城下図には内堀沿いに数馬殿と屋敷地がある。隣からは庶民の家となる侍地の北端にあたる。11間と17間とあり150坪ほどの広さだったことがわかる。現在の四ツ屋教会向かいの和菓子屋さんの奥にあたる。もりおか歴史文化館所蔵の『八戸南部直房系譜』によれば、最初、秋田県南に勢力を張っていた小野寺氏の家臣だった中野右馬之助は信直に500石で召抱えられた。その姉を数馬は妻に

していた。この中野家も重直によって改易になった。この中野家屋敷地は280坪である。この女性と離婚か死別かわからないが、川口源之丞正家娘孝と再婚している。孝の実家は200坪である。お城に近いとはいえ、やはり数馬の屋敷地は小さい。右馬之助の家臣が八戸藩士となる中野門助である。

南部直政が側近の僧理運に貞享三年（1686）に書写させた紺紙金泥法華経の巻一に父方の戒名がある。父方は祖父母南宗院（利直）と仙寿院、父清凉院（直房）と伯父即性院（重直）のあとに御古屋御料とあるのがこれが中野右馬之助姉に相当すると考える。

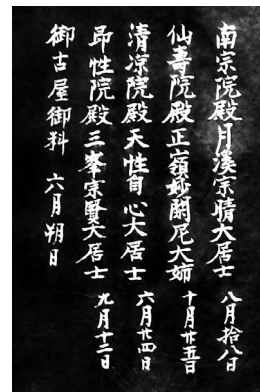


写真 10：福善寺経 父方戒名と祥月命日部分

13 婚姻関係をたどる

盛岡藩士川口源之丞正家は、現在の岩手町川口を知行地とする400石の中級藩士であった。彼の妻は志和の朝倉氏が実家だったものの高水寺城の斯波氏の滅亡とともに没落した。斯波氏が越前から奥州に下向する際に臣従して来た家臣の一人であった。室町幕府の管領を務める家柄の斯波氏の領国は越前と尾張であった、ともに守護代の朝倉氏と織田氏に領国支配権を奪われている。その朝倉氏一流の娘耕雲院が川口正家の妻であった。『系譜』川口家の条には、岩手郡や紫波郡に領地をもらった川村秀清の子孫とある。もともと川口家が紫波郡に領地を持っていたかどうかは証明できないが、耕雲院は紫波氏（志和氏）の出で、八戸藩士に採用された朝倉源多左衛門秋邦の姉妹と考えられる。実務にたけ、加増され志和庄左衛門と改名している。この時『系譜』には生国を姓とするとして志和の出身であることがわかる。実子が無く霊松院の甥川口利景の次男秀秋を養子として志和十右衛門秋堅とし、相続を許されている。弥次右衛門好高の孫である。川口家が没落して400石から70石になるが、志和氏は加増されて200石となる。川口家の世襲名與九郎、與

十郎、源之丞のうち、元々川口家出身秀秋の子作之進秋元は通り名を源之丞と名乗った。川口源之丞利景の孫にあたる。

正家と耕雲院の娘たちの嫁ぐ先も多彩だ。霊松院の母耕雲院は盛岡城御奥に勤務していた。この人脈からか、大坂の冬の陣に参陣した正家の交際からか、両方相まって婚儀が整ったのかは不明だが、二人の娘たちは、1100石の内堀家、500石の大釜家、300石の千種家、200石の中里家に嫁いでいる。姉妹の年齢や時期にもよるであろうが、400石の川口家の娘たちの嫁ぎ先の石高の差に驚く。孝自身が初婚かどうかはわからないし、川口家が改易となった明暦三年（1657）に孝は24歳になっている。何らかの事情で未婚だったか、実家の没落で婚家から戻され、母のもとに身を寄せていたのも知れない。孝が数馬直好にとの間直政を出産するのは寛文元年（1661）。この年の前年までには二人が結婚したことになる。直好には再婚、孝にとっては初婚か再婚かわからないが、明暦二年（1656）生まれの3歳か4歳の幼児である兄の忘れ形見甥の万之丞を連れて数馬に嫁いだ可能性が高い。万之丞の母は実家の高橋家に帰され、万之丞は叔母の孝が引き取って養育したことが、『系譜』川口家の条に見える。身重の孝にとって頼れる実家川口家はすでになく、母の実家朝倉家も没落していて、婚家の中里数馬邸で長男直政、次男直常を生んでいる。大きな梨の木があったようで、八戸立藩後、盛岡に残って残務処理にあっていた鶴飼宮内から、八戸まで旧数馬邸の梨が届いている。『日記』には「ありのみ」と記されている。直房一家が八戸に移住するにあたって、空き家となる中里数馬邸は、孝の妹が千種右近成賢に嫁いでいたことから妹夫婦千種家に譲られたことも『家系』によって裏付けられた。

14 『家系』の折紙と長紙と書付

南部信時の閉伊出陣に際して中里家の先祖武田河内が活躍した記述の後に縦線を引いて、元和二年（1616）九月十二日付の中里嘉兵衛宛て利直黒印状が書写され折紙だと記している。内容は、中里村の88余石と江荊村に2石余、太郎左衛門9石余、丹波に11石余で合わせて100石の知行を認めている。単純に足すと100石は越えるのだが。

もう一つは長紙で、寛永六年（1629）閏二月十五日付の中里弥次郎宛ての利直黒印状の書写である。中里

弥次郎正親は嘉兵衛正吉の子の半兵衛正次と同一人物で、利直側室仙寿院の兄にあたる。100石蔵米相当の30石を加増して200石の役儀を三月朔日から勤めることになったとある。

また縦線を引いて、中里とは閉伊郡の在所の地名で、本姓は板垣で、中ごろに武田と名乗った時期もある。詳しいことは系図や文書などを嘉兵衛の代に焼失してしまった。名乗りは「政」だったが、「吉」となり、最近では「幸」や「好」を用いるようになった。接待は元久慈氏で、代々中里家と婚姻を結んできた。岩泉は元東氏より分かれ、中里、接待、岩泉の結縁三家は閉伊郡の侍で数代の由緒がある。先祖は割菱の家紋で、名乗りは「信」の字であることを記して縦に区切り線を入れている。

中里
 中里半兵衛 盛岡 貳百石
 同半四郎 同
 八戸家僕
 中里弥次右衛門 知行五百石
 紋一松川菱
 同市太夫 同 百石
 紋右同断
 中里蔵人 同 四百石
 紋四松川菱
 中里与右衛門 同百五十石
 紋一松川菱内中ノ字
 中里孫二郎 同 百石
 中里覚右衛門 同 百石
 紋松川菱二重
 中里半九郎 同 百石
 中里与一右衛門 同 五拾石
 中郷藤右衛門 知行七十石
 紋扇中一松川菱
 中里甚右衛門 切符
 中里岡右衛門 同
 中里安太夫 同

と記して巻末になっている。切符については詳細までは記していないので含められないが、石高だけ合計しても中里12家で1570石の知行地を与えられている。盛岡藩士2家分は200石ずつの400石。八戸藩士中里諸家の惣石高数は1170石となる。1000石の知行を清左衛門が直政から与えられるという文書も伝えられるが、一家で1000石は二万石の八戸藩にとっては大変

な高禄となるが、中里一族で考えれば1000石を超えている。八戸家臣団の中樞を占め、藩政に多くの人材を提供した中里氏にとって、直房、直政が中里家を頼りとして、苦節の時代に受けた恩に報いたい、中里家の子孫を決して見捨てないと言う直房の思いが実現している。

15 『家系』に見える正徳、正吉、正次

書き出しは、●板垣弥二郎で、南部光行の下向に随行して、中里村に土着することが記され、●板垣弥二郎が二度繰り返され、代々この名を称号としたとして、●中里弥二郎の息子に武田孫二郎正徳に初めて具体的な記述が加わる。

御屋形信直から武田孫二郎の名を賜り、家紋は先祖の通り割菱であった。閉伊郡の某が背いた時に三戸へ馳せ参じて、抽んでた軍功をあげたので早速、閉伊郡中に器量の者と認められて足軽を抱えて軍役勤務するようになり、代々足軽預を勤めた。信直が武田氏のご連枝後胤なのを憚って中里隠岐が家紋を松川菱に改め、名乗りを「吉」の字に替えたと記している。

現在、岩泉町中里にある曹洞宗赤岩山正徳寺は、この中里隠岐正徳の正徳をとった寺名なのではないだろうか。中里氏の場合、正徳を開基とする庵、あるいは御堂があって、『岩泉地方史』にみえるように正保三年(1646)の建立と伝えられる元となった建物は存在したのではないだろうか。

八戸藩成立後もしばらく中里村は八戸藩領であり、中里代官が派遣されている。仙寿院は、釜石の尾崎社に御供80人を連れて参詣している。利直の側室とその子としては決して恵まれなかったのに息子が八戸藩主になり、彼女のことを皆が御袋様と呼ぶようになり、母子を守り育ててくれた実家の中里氏をはじめ、親戚筋の者達を盛岡藩よりも少しでも多い俸禄で召抱えたい。自分が藩主の生母である喜びを持って、故郷に錦を飾りたい。釜石尾崎社へ祈願成就の参詣の往復にその機会を創ったのである。先見隊として中里藤七右衛門や中里藤十郎を派遣して中里村に立ち寄っている。

どこで宴が催されたか記録はないが、中里半兵衛の館や屋敷あるいは正徳寺(その前身となる御堂)だったのかはわからないが、志和で大量に畳表を用意させ、畳み替えをした様子が『日記』に見える。志和で生産加工された藁草が大量に中里村に運ばれ、屋敷やお寺の畳替えに使われたのである。

盛岡藩士として残っている中里家の人々や、八戸藩士の中里家、あるいは仙寿院や広照院からの喜捨もあって、お寺が整えられていった可能性はあるが、昭和三十六年(1961)に起こった三陸フェーン大火で記録がすべて失われ、わからないままである。

信直の傘下には入った家臣は、基本的に本貫地の地名を苗字にするように命じられ、本領を安堵されている。利直から重直にかけて盛岡の城下の整備が進むと城下に屋敷地を与えられて住んだが、各氏とも本貫地に菩提寺を建立するようになる。大釜氏の滝沢市大釜の東林寺、川口氏の岩手町川口の明圓寺、内堀氏の花巻市石鳥谷新堀の新仙寺などがそれにあたる。中里氏の正徳寺は嘉兵衛正吉の父弥二郎正徳の名前から名付けられたと考えるのが自然ではないだろうか。

16 『家系』にみる婚姻と女性名

中里嘉兵衛正吉弟の覚右衛門の妻は山口家の娘で、覚右衛門の娘は山口助右衛門妻新兵衛母とある。八戸藩士山口家は七駄式人扶持で直房の代から仕え、およそ200石を維持している。山口助内は志和代官を長く務めている。岩泉庄作妻此母小本治助妻、女鹿助惣妻、舟越伊助妻、接待孫八郎妻中里清左衛門娘など、中里家と他家を結んだ女性たちの名前が沢山記されている。

川口家と大釜家が改易された後に藩が成立しているので、川口家の姻戚は当初の21人に一人も入っていない。家柄石高からすれば孝の姉天倫院が嫁いでいた内堀家が1000石を越える家老格で分士になっても問題ないように思えるが、それでは直房の中里家を重用して、恩返しすることが出来なくなる。最初から高禄のものは召抱えにくい。千種家が盛岡藩士として残った理由はわからないが、おかげで貴重な資料が残った。

霊松院の姉妹の嫁ぐ内堀家と千種家に、母耕雲院は、江戸にいる霊松院に費用を送金してもらって、八戸から江戸へ向かう途中で盛岡城下の二家に逗留している。娘家族、特にも孫の顔を見るのが何より楽しみだったに違いない。

直政が病死し、遺骨が江戸から南宗寺に到着し、江戸の金地院に引き続き、国元でも法要が行われ、4月20日の法要に盛岡から藩主家家族に続いて、青銅百疋を内堀民部が使者を立て、千種儀左衛門が青銅五拾疋を飛脚に託して香典を届けていることから四姉妹を調べることが出来た。

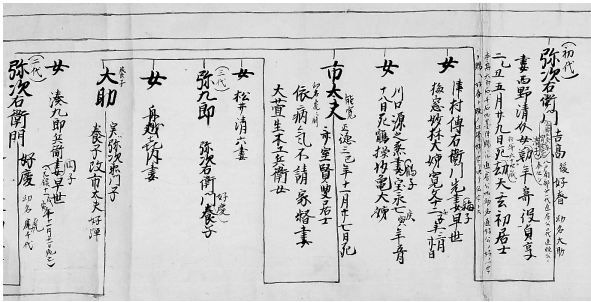


写真 11：『家系』 初代弥次右衛門の子女部分

初代弥次右衛門の妻が西野清介の娘であることと、娘が三人いて津村傳右衛門先妻梅子であり、後妻が千種儀左衛門と覚心院の娘が嫁す霊松院の姪である。もう一人は川口源之丞妻鶴子とある。戒名が鶴操妙龜大姉で霊松院甥川口利景の妻で與十郎利雄の母である。南宗寺の廃棄された川口家の墓石の中で五輪塔なのは利景夫妻のものだけである。三人目は湊九郎兵衛妻円子である。直房母仙寿院の甥にあたる弥次右衛門は太郎左衛門の子で家老として手腕を振り、与右衛門の子が清左衛門で直政の傅役のち家老として活躍した。ともに盛岡藩士として残った半兵衛の甥にあたる。この『家系』によって中里氏を軸とする婚姻関係が八戸藩士を採用していく基準だったことがわかった。

17 おわりに

八戸立藩時の初代藩主の官職名は、20代信時の官職に由来し、分士21という数は、初代光行の奥州下向に随行した侍数にちなんでいた。二つとも初代藩主生母実家中里家の嘉例を元に考えられたものであった。八戸藩士の採用には、中里家を基軸とした婚姻関係が大きな役割を果たしていたことがわかった。資料紹介や『中里家系』の閲覧と写真掲載許可をいただいた中里直美氏と八戸市史編さん室に改めて感謝申し上げます。

参考文献

- 荻原芳（編）（1974）『岩手史叢 第四巻 内史略（4）』岩手県文化財愛護協会
- 関口喜多路（編）（1980）『岩泉地方史＜下巻＞』岩泉町教育委員会
- 前川隆重・加藤章・樋口政則・山本實（編）（1985）『南部藩参考諸家系図』国書刊行会
- 八戸市立図書館市史編纂室（編）（2001）八戸の歴史双書『八戸藩士系譜書上』八戸市
- 八戸市立図書館市史編纂室（編）（1999）八戸の歴史双書『八戸南部史稿』八戸市
- 森越良（編）（1993）『解説八戸藩目付所日記』
- 三浦忠司（1997）『幼少の八戸藩主と中里家—中里家文書の紹介—』青森県史研究（1）
- 中里幸生（編）（1721）八戸市博物館『旧話集』
- 中里幸生（編）（1721）八戸南部家文書『御二代集』
- 細井計（校閲）（1996）『盛岡藩 雑書』第十巻
- 中里直美蔵『中里家系』
- 中里直美蔵（1768）『明和五戊子天 過去牒 正月改』
- 中里直美（1987）『八戸地域史』第11号「みじか史《八戸藩における中里氏》」
- 中里直美（1988）『八戸地域史』第12号「八戸藩における中里氏の事績」
- 中里直美（1988）『八戸地域史』第19号「『系譜書上』に見る八戸藩の家臣団」

要旨

初代八戸藩主の官職名「左衛門佐」は藩主生母の先祖が軍功をあげた際の南部家20代当主信時の官職にならない、分士21人の由来は南部家初代当主光行の奥州下向の随行侍数にちなみ、先祖がその随行の一員であったことの二つが、ともに生母仙寿院の実家中里家の嘉例からとられ、中里家の顕彰につながっていたことがわかった。

キーワード：南部直房、仙寿院、左衛門佐、分士21人、中里弥次右衛門